一人称の訳から見る『假名列女傳』の人物像

―「妾」の訳語を中心に―

熊　慧　蘇

季吟の『假名列女傳』(注1)（一六五五）は前漢劉向の『古列女傳』(注2)を翻訳した仮名草子である。全八巻百二十四篇を原作通りに完訳し配列している。概ね各話は原作に忠実に訳されているが、具体的な内容になると、異なる部分もある。例えば、話によって原作の一部分を省略したり、増やしたりしている。また、翻訳が底本とする原本は和刻本『劉向列女傳』であり、その訓点に従ったため誤訳になる部分もところどころにある。従来の『假名列女傳』研究では、原作『古列女傳』との部分的な比較はなされてきたが、作品全体を視野に入れて原作と比較し論じることはまだされていないようである。また、基本的に原典に忠実な翻訳と見られているため、作品中の人物像の考察は十分であるとは言えない。

稿者は以前、『古列女傳』全体と関係づけながら『假名列女傳』の翻訳手法をまとめたことがある。(注3)その末尾で原文の同一単語を、場面や人物の立場に合わせて多様に訳すことによって、原作の人物像に精細さを加えたと述べた。また簡略ながら、人称代名詞の「妾」「子」は場面や相手によって使い分けされていることも指摘した。

本稿では主に、『古列女傳』にある一人称、とりわけ女性の自称「妾」が、『假名列女傳』でどのように訳されているのかを、各巻の性質と話者の社会的地位や環境などを考慮しつつ分析する。それによって、原作との人物像の相違を浮き彫りに

し、そこから見えてくる日中の文化や時代背景を指摘したい。

具体的には、『古列女傳』の一人称の使用状況、「妾」と「吾、我」の使い分けからみる『古列女傳』の人物像、『假名列女傳』における一人称の訳、「妾」の訳語からみる『假名列女傳』の人物像、古代中国女性と江戸女性、以上五点からみていく。

一、『古列女傳』の一人称の使用状況

古代中国の一人称には、「吾」「余」「予」「我」「妾」「朕」などがある。辞書では以下のような説明がされる。

吾　『説文解字』　我自偁也。从口、五聲。

『大漢和辞典』　㈡㈠**われ**。**わが**。［説文］吾、我自稱也、从口五聲。

『廣漢和辞典』　㈡①**われ**。じぶん。わが。じぶんの。自分の身についていう場合に吾といい、人に対して自分をいう場合、我という。

我　『説文解字』　施身自謂也。或説我、頃頓也。…凡我之屬皆从我。

『大漢和辞典』　㈠**われ**。㋑わたくし。おのれ。みづから。㋺わがかた。うち。自國。味方。㈡**わが**。おのれの。㋑自己に属することをあらわす辭。㋺親しむことに冠する詞。我が親愛する所のといふ意。

『廣漢和辞典』　①**われ**。㋐わたくし。じぶん。自称の人称代名詞。㋑わがかた。わが方。味方。わが軍。わが国。②**わが**。㋐自分に属することを表す語。㋑自分の味方や国を指していう語に冠する語。㋒親しみの意を表す語。親愛する人や物にいう。

余　『釋詁』　余、我也。余、身也。

『大漢和辭典』 ㈠㈠**われ**。予に通ず。
『廣漢和辭典』 ㈡㈡①**われ**。⇓予。

予

『大漢和辭典』 ㈡**われ**。余に通ず。
『廣漢和辭典』 ㈡㈡**われ**⇓余。

妾

『説文解字』 有辠女子給事之得接於君者。从辛女。《春秋傳》云：「女為人妾。」妾、不娉也。
『大漢和辭典』 ㈣**わらは**。婦人の卑下していふ自稱。
『廣漢和辭典』 ④**わらわ**。わたし。婦人がへりくだっていう自称。

簡単に言うと、「吾」「我」「余」「予」は自分もしくは自分に属すことを示す一人称として用いられ、謙遜の用法はあまり含まれない。「妾」の字は『説文解字』に罪のある女という意味があるように、古くは女性の自称の謙遜語として用いられている。「婢」も「女之卑者也」（『説文解字』）であるため、「婦人が自ら謙遜していふ辭。［禮、曲禮下］自世婦以下、皆稱曰婢子」（『大漢和辭典』）である。

『古列女傳』は第三者が語る伝記小説である。主人公が「妾」「吾」「我」といった一人称を用いるのは、主に会話文にみられる。記述文のみの場合は一人称はあまり使われていない。全八巻124篇のうち、一人称が用いられるのは91篇である。巻毎に示せば、巻之一母儀傳に7篇、巻之二賢明傳に13篇、巻之三仁智傳に10篇、巻之四貞順傳に11篇、巻之五節義傳に15篇、巻之六辯通傳に15篇、巻之七孽嬖傳に5篇、巻之八續列女傳に15篇といった内訳になる。

具体的に見ると、主に「妾」「吾」「我」「婢子」「余」「予」の六つの一人称が使われている。その使用頻度は、一人称のある91篇のうち、「妾」62篇、「吾」35篇、「我」17篇、「婢子」5篇、「余」と「予」がそれぞれ1篇である。同じ話の中に複数の一人称があることも多い。また巻毎に収録される話は巻之一が14篇、巻之八が20篇のほか、巻之二から巻之七までがすべて15篇となっている。右の内訳を見ると、巻之一と巻之七が極端に少ないのに対し、巻之五と巻之六はすべて一人称が

使われている。巻之五節義傳について言えば主人公たちは自らの節義を守るために語る必要があり、巻之六辯通傳の主人公たちは自分の目的を達成するために弁舌を振るう必要があるからである。この一人称の使用頻度に各巻の性質が表れているという見方もできよう。同様に各一人称の使用状況から話者の人物像を窺うこともできる。

二、「妾」と「吾、我」の使い分けからみる『古列女傳』の人物像

『古列女傳』は女性の伝記であるため、自称に「妾」「婢子」が多いのは当然である。「吾」「我」「余」「予」を併用することには作者の意図があると考えられる。全体を見ていくと、六つの一人称は話し手と聞き手の身分や社会的地位、人物像によって使い分けられている。人間関係を基準に分けると、概ね以下の四つのパタンになる。A、「妾」「婢子」は主に妻が夫に、民婦が王や官僚に対して語るように、身分や社会的地位が下にある話者が上にある者に対した場合に用いられる。B、「吾」「我」「余」「予」は主に、母が子に后が傅母に語るように、身分や社会的地位が上にある話者が下にある者に対した場合に用いられる。C、隣人同士のような対等の立場にある場合、話者は、「我」「吾」を用いる事が多い。しかし、同じ身分であっても、立場の弱い話者には「妾」を用いることが多い。D、貞女節婦（巻之四貞順傳、巻之五節義傳と巻之八續列女傳にある貞順節義の主人公を対象とする）は敵など味方でない相手にも謙遜語として「妾」を用いることが多く、悪女（巻之七孽嬖傳と巻之八續列女傳にある孽嬖の主人公を対象とする）はいかなる場合でも自己主張として「吾、我」を用いることが多い。

まずAの「妾」「婢子」を用いる例として、巻之二賢明傳が挙げられる。巻之二は主に賢明な女性が夫を案じて助言したり諫めたりする美談である。15篇のうち13篇に第一人称が使われ、「妾」「婢子」を用いるのは11篇である。九「陶答子妻」

は嫁が姑に、十「柳下恵妻」は妻が夫の門人に「妾」を用いるほか、一「周宣姜后」、二「齊恒衛姫」、四「秦穆公姫」、五「楚荘樊姫」、八「晋趙衰妻」、十二「齊相御妻」、十三「楚接輿妻」、十四「楚老莱妻」、十五「楚於陵妻」の9篇は、ともに妻が夫に「妾」「婢子」を用いている。例えば、十三「楚接輿妻」、十四「楚老莱妻」、十五「楚於陵妻」は、ともに楚王の出仕要請を受けた賢人たちが妻の諫めで隠遁し、乱世をつつが無く過ごした話である。その主人公たちは夫を「先生」と敬称し、自分のことを「妾」と謙遜する。低い姿勢を取りながらも夫をリードする賢妻像が、人称を通して表れている。

Bの「吾」などが用いられる例を巻之一母儀傳で見てみよう。14篇のうち一人称があるのは7篇で、「妾」との併用を含めて「吾」などが使われたのは6篇である。いずれも母から子に対して用いられている。例えば九「鄒孟軻母」の前半は孟母三遷の話である。孟母は家を選ぶときに「此非**吾**所以居子處也」「真可以居**吾**子矣」と、判断を下す。この「吾」には自分を念頭に息子の将来を案じる母親の意志が表れている。また、孟子の学問に対する態度に、「子之廢學，若吾斷斯織也」と叱る。ここに対称「子」、自称「吾」を用いている。

一つの話にABを併用することもある。巻之一の十二「魯之母師」の主人公は、相手によって謙称の「妾」と自称の「吾、我」を両方用いる。主人公の母師が息子や嫁たちに語りかけるときには、「**吾**從汝謁往監之」「今諸子許**我**歸視私家」のように、「吾」「我」を使っている。魯国大夫の問いに答えるときには、「**妾**不幸早失夫…**妾**恐其酺醵醉飽…**妾**反太早…」のように、「妾」を用いている。一人称の使い分けで主人公の礼儀正しい人物像が浮き彫りとなってくる。

同じ一人称の使い分けは巻之五節義傳二「楚成鄭瞀」にもみられる。

鄭瞀は楚成王の夫人である。夫である成王との会話は、「**妾**聞婦人以端正和顔為容。今者大王在臺上而**妾**顧，則是失儀節也」のように、自分を「妾」という。一方、保母との会話は、「**吾**聞婦人之事…**吾**不能藏」のように、自称を「吾」としている。礼儀正しいゆえ夫人となり、節義を守るため自殺した主人公の性格は、一人称の使い分けにも表れているのである。

では、Cの身分や立場が相似する話者の場合は、具体的にどのように一人称を使っているのだろうか。

巻之三仁智傳十三「魯漆室女」は同身分の隣人同士の会話である。最初主人公の漆室女が隣婦の問いに答える箇所で、「其鄰人婦從之遊，謂曰：何嘯之悲也、子欲嫁耶？吾為子求偶。漆室女曰：嗟乎，始吾以子為有知，今無識也。吾豈為不嫁不樂而悲哉，吾憂魯君老大子幼」のように、自分を指すときには互いに対等的な「吾」を用いている。続いて隣婦の「此乃魯大夫之憂，婦人何與焉」という嘲笑いに対する漆室女の反論も、自身の経験を論拠として「吾」「我」を連発している。

不然，非子所知也。昔晉客舍吾家，繫馬園中，馬佚馳走，踐吾葵，使我終歲不食葵。鄰人女奔隨人亡，其家倩吾兄行追之，逢霖水出，溺流而死，令吾終身無兄。吾聞河潤九里，漸洳三百步。今魯君老悖，太子少愚，愚偽日起。夫魯國有患者，君臣父子皆被其辱，禍及眾庶，婦人獨安所避乎？吾甚憂之。子乃曰婦人無與者，何哉？

ここまでの一人称は単純に自分を指す「吾、我」、もしくは自分に属することを表す「吾家」「吾葵」、親しみの意を表す「吾兄」の「吾、我」を使っている。しかし、右の漆室女の識見あふれる話に圧倒され、隣婦は思わず謝り、「子之所慮，非妾所及」と感心する。ここで用いたのは謙遜の「妾」である。つまり、これまで対等だった二人の関係は、漆室女の見識の高さによってバランスが崩れ、隣婦が下位になってしまったのである。

巻之六辯通傳十四「齊女徐吾」も隣人同士の話である。主人公徐吾は齊国の貧婦で、夜は隣婦たちと集まって糸を績いで生計を立てる。しかし貧しさゆえ夜なべするための灯油代も捻出できず、仲間から追い出されそうになる。そこで彼女は隣婦にこう語る。

是何言與。妾以貧蠋不屬之故，起常先，息常後，灑掃陳席，以待來者。自與蔽薄，坐常處下，凡為貧蠋不屬故也。夫一室之中益一人蠋不為暗，損一人蠋不為明。何愛東壁之餘光，不使貧妾得蒙見哀之恩，長為妾役之事，使諸君常有惠施于妾，不亦可乎。

わたくしは調達できる蝋燭が足りないため、いつも早く来て掃除などを済ませ、下座に身を置いています。蝋燭が部屋にいる人数と関係なく明るさは同じですので、わたくしがいるからといってみなさまの損にはなりません。その上、この貧し

いわたくしに恩に着せることもでき、いいではありませんか、と。同じ身分でありながら、より貧しいため、言葉遣いも自ずと卑下的になる。自己主張しながらも、自分のことを「妾」「貧妾」とへりくだる。隣婦は返す言葉もなく、以後なにごともなく彼女を受け入れた。

人物像でいちばん比較しやすいのは貞女節婦と悪女だろう。Dの一人称の使い分けを貞女節婦と悪女の人物評価からみると、『古列女傳』の人物像がより鮮明になる。

貞女節婦は社会的な人間関係においては一般的にABCのように一人称を使い分ける。但し、敵に迫られるときや無理強いされるときなどのような、危機的な人間関係に置かれるときに、謙遜語として「妾」を用いることが多い。ここではABCに準ずる具体例を省き、異質な例として、敵に迫られるときと無理強いされるときの用例を一例ずつ挙げてみることにする。

巻之四貞順傳九「楚平伯嬴」の主人公伯嬴は、楚平王の夫人である。楚国が呉国に敗れて、都は敵に占領された。呉王は後宮の妃たちを尽く犯し、ついに伯嬴のところにも迫ってきた。伯嬴は刀を手に呉王に立ち向かい、天地人倫から相手の行いまで礼儀をもって説き、たとえ死んでも王様の思い通りにはなるまいと拒否する。この伯嬴の語りは全篇の大半をしめ、「妾聞生而辱不若死而榮…妾有淫端，則無以生世…妾以死守之，不敢承命…近妾而死，何樂之有。如先殺妾，又何益於君王」などと敵を相手に七回も自称に「妾」を用いている。低い姿勢ながらも固い意志が強調される。

同じく巻之四の十四「梁寡高行」の主人公高行は梁の寡婦である。美貌の持ち主であるので、しばしば梁の貴人たちに再婚を求められる。とうとう噂が梁王の耳に入り、丞相を遣わせて娶ろうとする。王の綸旨には背けない。が、貞節を守らなければならない。まして幼い子を孤児にすることもできない。「婦人の義とは、一旦嫁いだら改めずに貞節と信義を全うすることと聞いております。いまわたくしが死んだ夫を忘れて王様のもとへ行くならば、信義ない人間になります。貴いのを見て賤しいのを忘れるのは不貞でございます。義を捨て利に従うことはできません。（妾聞婦人之義，一往而不改，以全貞

信之節。今忘死而趨生，是不信也。貴而忘賤，是不貞也。棄義而從利，無以為人)」、とまず大義をもって断る。そして自分の鼻を削り、「わたくしはすでに刑を受けました。幼子がまた母親を失うことは忍びがたいため、このように生き延びようとしています。王様がわたくしを求めるのは外観ゆえでございましょうが、このような顔になったいまは、もう無意味でしょう（妾已刑矣。所以不死者，不忍幼弱之重孤也。王之求妾者以其色也，今刑餘之人，殆可釋矣)」と、行動をもって梁王の怒りをそぐ。話しの中で「妾」を六回用いる。強い語気で行動しながら、自分を卑下して話す。

敵や無理強いする相手にも「妾」を用い、謙遜しながら強い意志を示し、自分を守りながら相手を退ける。強く賢く礼儀正しい貞女像が自称によっていっそう強められている。

では、悪女たちはどのように一人称を使うのだろう。

巻之七孽嬖傳は妲己ら悪女たちの悪事を書きしるす傳である。主人公たちのほとんどは王侯の夫人であり、彼女らの野心と淫行によって国が滅びたり、内乱に陥ったりする。全15篇のうち一人称が使われるのは5篇で、うち4篇は「吾、我」を使用する。共通しているのは、目的を達成するため、自己主張を強めて「吾、我」を用いることである。人物によって、次のように具体的な話法が異なる。二の「殷紂妲巳」は妲己が夫である紂王に「**吾**聞聖人之心有七竅」と唆し、自分の非行を諫める忠臣比干を殺させる。ここの「吾」には夫を思い通りに操ることができる、妲己の狡賢さが窺われる。七の「晉獻驪姬」は驪姫が夫である獻公に「**吾**聞申生…今謂君惑于**我**，必亂國…胡不殺**我**，無以一妾亂百姓」などと、自分の息子を世継ぎにさせるため太子を中傷し、理不尽なことをいう。ここの「吾、我」からは寵愛をもって夫に讒言し脅迫する、無頼な悪女像が浮かび上がる。八「魯宣繆姜」は繆姜が史官の占い解釈に「有四德者，隨而無咎，**我**皆無之，豈隨也哉」などと、周易で反論する。宣公夫人は身分が史官より上であるため、当然の如く「我」を用いている。十二「衛二亂女」の南子は自分の不倫を知った太子を讒言し、夫の霊公に「太子欲殺**我**」と言う。悪事をしているのにもかかわらず、「我」を用いて自分が被害者であるかの如く装う。

十四「楚考李后」の主人公李后のみは「妾」を用いる。それは彼女が楚考烈王の后になる前に、春申君という人の妾であったため、主に話すときに卑下の「妾」を用いるからだと考えられる。

巻之八續列女傳にも悪女を主人公とする、十「霍夫人顯」、十五「趙飛燕姊娣」と十七「更始夫人」の3篇がある。それも巻之七と同じく三人の悪女は、相手との身分関係にかかわらずみな「我」を用いる。

以上A、B、C、D四つから『古列女傳』における一人称の使用を見てきた。『古列女傳』では、意識的に一人称を使い分けていることがわかる。一般的に、身分や社会的地位が下である妻から夫に、民婦から王や役人に対しては、卑下の自称「妾」「婢子」を用いる。逆に身分や社会地位が上である母から子に、后から傅母に対しては、指示代名詞の「吾」「我」を使う。また、対等的な立場にある女性たちは、指示代名詞の「吾」「我」を用いることが多い。但し、経済的な条件や会話の状況などで下位になる女性は、卑下の「妾」を用いることが多い。貞女節婦は味方以外にも謙遜の「妾」を用いることが多く、悪女は権力者の寵愛を盾に相手によらず自己主張して「吾」「我」を使うことが多い。物語は第三者よりも本人が語る方が、より鮮明になる。加えて人物によってそれを使い分けることで、物語の内容だけでなく、言葉の面からも人物像を引き立て、良妻賢母像、貞女像、節婦像、悪女像のそれぞれを浮き彫りにすることができる。

三、『假名列女傳』における一人称の訳

『假名列女傳』の一人称は「やつかれ、われ、わが（あが）、わらは、妾、やつこ、みづから」である。このうち「わが」は「わが子、わがせこ」など連体語として使われることが多い。『古列女傳』にある六つの一人称と対照してみると、概ね「妾」「婢子」を「やつかれ」「妾（せう）」「やつこ」「わらは」と訳し、「吾」「我」を「われ」「わが」と訳している。もちろん、すべて単純な逐

語訳ではないので、付加や省略もある。ここで『古列女傳』と対応してA、B、C、D四つの一人称を中心に、『假名列女傳』がどのように訳しているのかを確認する。

まずはABから見ていこう。

「妾」「婢子」の訳を巻之二賢明傳では、原文の一「周宣姜后」の「妾」「婢子」をともに「やつかれ」、二「齊恒衛姫」の「妾」を「妾（せう）」、四「秦穆公姫」の二カ所の「婢子」を「わが」「やつかれ」、五「楚莊樊姫」、八「晋趙衰妻」、九「陶答子妻」の「妾」を「やつかれ」、十「柳下恵妻」の「妾」を「わらハ」、十二「齊相御妻」、十三「楚接輿妻」、十四「楚老莱妻」、十五「楚於陵妻」の「妾」を「やつかれ」と訳している。巻之一母儀傳に「吾」「我」が6篇あるうちの5篇を、「わが」「われ」と訳している。ただ、七の「衛姑定姜」は対応する部分が省略されたため、訳出されていない。「吾、我」と「妾」の両方を用いる十二「魯之母師」も右のように、子に言う「**吾**從汝謁往監之」「今諸子許**我**歸視私家」を、「**我**（われ）、汝（なんぢ）に、從（したが）ひゆきて、ミまくほしき」「今、わが子ら。**わが**、わたくしのいへを、見そなはしに、かへらん事を、ゆるし聞えたり」と、魯国大夫への答え「**妾**不幸早失夫」を「**やつかれ**、さいはいなくて、はやく、おつとに、はなれてやもめにして…」と、「吾、我」を「われ、わが」に、「妾」を「やつかれ」に対訳している。巻之五節義傳二「楚成鄭瞀」の鄭瞀の会話も、夫に対する「妾」を「やつかれ」、保母に対する「吾」を「われ」と訳している。

つまり、AとBは『假名列女傳』が原作の一人称の使い分けを心得て、漢語の謙遜語「妾」「婢子」を和語の「やつかれ」「わらは」に訳し、単純な自称の「吾、我」を「わが、われ」と対訳しているとわかる。

しかし、Cの身分や立場が相似する話者の用いる一人称は、必ずしもABのような原作に即した訳をされていない。

『古列女傳』巻之三仁智傳十三「魯漆室女」の隣人同士の会話がほとんど対称の「吾」を用いるのに対し、『假名列女傳』は最初の二カ所のみ「われ」と訳され、その後はすべて「わらは」と訳されているのである。

ちかどなりなる、をんな。これと、ともなひ、あそびける、つゐてに。

いかで、かく、うそふくことの、かなしかるらん。わごぜ、もし、よめいり、せまほしく。おもへるにや。**われ**、よき、おとこを、もとめ、きこえましよ

隣婦が漆室女に声をかけるときには原文通り、「吾」を「われ」と訳している。しかし、以下漆室女の答えは一句目を除いて、残りの「吾」がすべて「わらは」と訳されている。

いでや、**われ**、はしめ、わごぜハ、さかしく、ざへある人と、思ひつるに。さも、なきぞかし。**わらは**、何しに、おとこ、もたぬを、かなしまん　今、魯のきミハ、とし、よらせ玉ひて。太子ハ、いわけなく、おはします。これこそ、**わらハ**の、うれへにハ、あれ

と、こたへけれバ。となりの、をんな、うちわらひて。

それハ、魯の大夫の、うれへにて。しづのめなどの、かまふべき事かハ

と、いひけるに。むすめの、いはく。

いなや、わごぜの、しらざる所也。いつやらん。晉のまれうと、**わらハ**が、いへに、やどりて。馬を、そのふに、つなぎしに。むま、はなれいでゝ。あふひを、ふミて。其とし、あふひを、**わらハ**に、くはせ侍らざりし。又、となりなる人の、むすめ。人に、いざなハれて、わしりゆきし事ありしに。隣の人。**わらハ**が、あにを、やとひて。其行がたを、をひ尋ねさせ侍しに。なが雨の跡の、水出しに、あひて。これに、おぼれて、うせにしかバ。**わらハ**、身を、ゝふるまで。兄と、いふ物、侍らず。かの河水の、とをく、うるほひを、つたふる、ためしも、あれバ。今、魯の君、老ひがミ。太子、いわけなく、をろかにて。國の亂、あらましかバ。君臣父子、なべて、其わざハひを、かうふりつゝ。さて、もろ〳〵の人に、をよバん時。いやしき、賤のめとても。いかで、のがるるかた、あらん。**わらハ**、、是を悲しむに。わこぜの、かまハぬ、と、いへるなん、あやしき

と、いひけれハ。隣の女。

そこの、おもひ、はかれる所ハ。**わが**、をよぶ所に、あらず

と、いひをりけり。

面白いのは、原作最後の隣婦の感心した言葉には「妾」が用いられていることである。季吟はここを逆転して、「わが」と訳したのである。

この話における一人称の訳は、季吟の主人公に対する認識を反映していると思われる。小学館『古語大辞典』の「わらは」条には、鎌倉時代以降、召し使われる童子・童女が自分を「わらは」と呼んだことが、「一般化して、若い女性の謙遜の自称代名詞となったのであろう」とする。主人公の漆室女は若い未婚の娘であるため、「わらは」を用いられたのであろう。一方の隣婦は漆室女より年上のはずなので、年下の相手には「われ」を用いたと考えられる。従って、ここの一人称はAとBに近い訳し方をしていると言えよう。

Dの悪女が「吾、我」を用いる話においては、原作とほぼ同じである。巻之七の二「殷紂妲巳」に妲己の「吾聞聖人之心有七竅」発言を、「**われ**、きく。聖人の、むねにハ。七つのあな、あり、と、なん。いま、**こゝろミ玉へかし**」と「吾」を「われ」と訳し、直接に比干を殺すことと明言する。妲己の無遠慮さが付け加えられた。七「晉獻驪姫」の驪姫がいう「吾聞申生…今謂君惑於**我**，必亂國…胡不殺**我**」を、「**われ**、きく。申生の…きミの、**わが身**を愛し玉ふに、まどひて。かならず、くにたミを、ミだり玉はんと、いへりとか…ねがハくは。**わが身**を、ころさせ玉へかし」と「吾」を「われ」、「我」を「わが身」と訳す。八「魯宣繆姜」にある繆姜の「**我**皆無之，豈隨也哉」の言葉を、「**われ**にハ、ミな〳〵、この徳なけれバ。いかでか、隨ならん」と「我」を「われ」と訳す。十二「衛二亂女」の南子の「太子欲殺**我**」も、「太子、**われ**を、ころさんと、し侍り」と「我」を「われ」としている。巻之八續列女傳の十「霍夫人顯」の霍夫人がいう「我女」を「わがむすめ」、十五「趙飛燕姉娣」の趙昭儀がいう「今當安置**我**」などの「我」を、「いま、**ミづから**を、いづくにか、をき玉はん」のように、「みづから」と訳している。十七「更始夫人」の「帝方對**我**飲樂」も、「今。ミかど。まさに、**ミづから**と、さかもりし玉へり」

と「我」を「みづから」に訳している。

ところが、貞女節婦の場合になると、原作との違いが多くなる。「妾」を「やつかれ、わらわ」と訳さずに、「われ、わが」と訳すことが目立つ。原文と比較していくと、人物像の相違が見えてくる。

四、「妾」の訳語からみる『假名列女傳』の人物像

二に述べたように、原作の「妾」は人間関係から見て、Aの身分や社会的地位が下にある女性が卑下語として用いることが多く、Cの対等な身分や社会的地位であっても、経済状況などが下位の女性が卑下語として使う。また、Dの貞女節婦が味方でない相手にも謙遜語として用いることが多い。

『假名列女傳』は、『古列女傳』に使われる62篇の一人称「妾」を、主に「やつかれ（42篇）」と訳している。ほかに、「われ（16篇）」「わが（8篇）」「妾（5篇）」「やつこ（3篇）」「わらは（2篇）」「みづから（1篇）」と訳すこともある。同じ「妾」でも、一つの話の中に、「やつかれ」「われ」「妾」など複数の訳があることもある。一般的に「やつかれ、わらは、やつこ、妾」は謙遜語として、「われ、わが、みづから」は自分自身を指す指示代名詞として使われている。

ここでは「やつかれ、わらは、やつこ、妾」を謙称「妾」の訳と見なす。これらが1語でも用いられているのは『假名列女傳』で47篇あり、内訳を見ると、妻から夫に、民婦から王など上位の相手に対して用いるのが36篇、対等な相手に用いるのが6篇、貞女節婦が用いるのが10篇（上位の相手を含む）である。「妾」を「われ、わが、みづから」と訳す22篇のうち、妻から夫に、民婦から王など上位の相手に用いるのが13篇、対等な相手に用いるのが4篇、貞女節婦が用いるのが14篇（上位の相手を含む）である。「妾」を「やつかれ、わらは、やつこ、妾」とする場合は、三で比較したように、原作とほぼ同

じイメージで訳されている。しかし、「われ、わが、みづから」に訳した話は、話者の人物像が原作と異なる一面が見られる。特に貞女節婦に「われ、わが」を用いることによって、より強い人物像となっているのである。

貞女節婦の話を中心に訳文を原文と対照し、具体的な人物像を比較してみたい。まずは巻之四貞順傳から見ていこう。

四「蔡人之妻」は病気の夫に嫁いだ女性が、母親の再婚の命令を断る話である。主要な原文は以下の通りである。

其母將改嫁之。女曰：夫之不幸，乃妾之不幸也。奈何去之。適人之道，一與之醮，終身不改。不幸遇惡疾，不改其意。且夫采采芣苢之草，雖其臭惡，猶始于捋采之，終于懷擷之，浸以益親。況於夫婦之道乎。彼無大故，又不遣妾，何以得去。終不聽其母，乃作芣苢之詩。

母は再婚させようとする。娘は以下のように述べる、夫の不幸はわたくしの不幸なので、どうして去れるのでしょうか。嫁ぐことは一旦儀式を整えたら一生改めません。病気にあってもそのこころは変わりません。例えば芣苢を採るときに、最初はくさいが、採って抱えているうちに親しみがでてきます。夫婦の道も同じです。彼は大して悪いところがなくわたくしを追い返すこともありませんので、どうして去れるのでしょう、と。ついに母親の話を聞かず、芣苢の詩を作った。

古代中国では、婚姻は父母の命令によるもので、娘の意志は尊重されない。ここも母親が独断的に「將改嫁之」となっている。「終不聽其母」からみると、母親は何度も離縁せよと言っただろう。娘は低い姿勢で「妾」を用い、「奈何去之」「何以得去」と情をもって母親を説得する。独断的な母と柔らかくて芯の強い娘像が短い表現で描き出されている。

『假名列女傳』のこの部分は、

女の母、いと、心うがりて。あらためて、こと人に、あハせん、と、かくまへにけれバ。女の、いなひて、いふやう。夫の不幸ハ、**わが**不幸なり。いかでか、こと人を、もとめて。これを、すて侍らん。人の、めとなるの、ミちハ。ひとたび、これと、ちぎりてハ。身を、をふるまで、あらたむべからず。しかるに、わが夫、さいわい、なくして、かゝる、やまひあり、と、いへども。かれに、ことなる、ゆへも、なく。又、**ミづから**を、すつる、けしきも、あらず侍

る物を。何によりてか、さて、あらため侍るべき。

かの、おほばこを、とるに、其にほひ、よからず、と、いへども、なを、はじめハ、これを、とり取て、をはりにハ、これを、ふところにし。つまはさミつゝ、やう〳〵に、ます〳〵、したしミぬ。

いはんや、いもせのミちに、をゐておや

といひて、つゐに、其母の心にも、したがハず。おつとを、あらたむる事なくして。まことや、かの茉莒（ふい）の詩を、つくりて。

そのこゝろざしを、のべたり、と、なん。

となっている。母親は娘のことを心配して、再婚話をひそかに持ちかけたが、娘に突っ張られ断わられる。「去之」を「すて侍らん」と訳すことによって、再婚することは不義であることが強調される。また、傍線部分の訳は原文と前後している。論理的にするためであろうが、語気は原文よりも強くなっている。そして、「妾」を「わが」「みづから」と変えることによって、娘の意志を押し出してくる。最後に「そのこゝろざしを、のべたり」を加えるのも、娘の貞節の強さを表すためであろう。母の人物像は原作と逆転している。

十五の「陳寡孝婦」も四と同じく親が娘を再婚させようとし、娘が断る話である。ただこの話では娘が若くして寡婦となり、子もないゆえ、親が不憫と思って勧めたとなっている。

母曰：吾憐女少年早寡也。孝婦曰：妾聞寧載于義而死，不載于地而生。且夫養人老母而不能卒，許人以諾而不能信，將何以立于世。夫為人婦，故養其舅姑者也。夫不幸先死，不得盡為人子之禮。今又使妾去之，莫養老母，是明夫之不肖，而著妾之不孝。不孝不信且無義，何以生哉。因欲自殺，其父母懼而不敢嫁也，遂使養其姑二十八年。

親の心はわかっているはず。だけど信義を全うしたい。いまわたくしを老母から離れさせ、養わせないようにすれば、わたくしを不孝にさせることですよ、と自殺をもって親を譲歩させる。信義のある娘だが、少しわがままのようだ。自称は母親が「吾」、娘が「妾」でAと同じである。

女のはゝの、いハく。

われ、ふかく。いましの、わかくして。はやく、やもめなる事を、あハれむぞかし。まげて、あらため、きこえよかし

と、いへりしに。孝婦、又、いはく。

人のよめとしてハ。まことに。其しうと、しうとめを、やしなふべき、ミちなるべし、いま、夫、不幸にして、さきだちて、身まかりぬるハ。人の子の、礼をつくす事を、えざる也。

又、其うへに、**われ**だにも、これを見すてゝ。ほかに、ゆきつゝ。老母を、やしなふ事、なからしめば。これ、夫の、不肖を、あかして。**ミづから**が、不孝を、あらハす也。

孝あらず。信あらず。かつ、義あらずは。何の、いきたるかひ、あらん

とて。やがて、自害せん、と、したりけれバ。人々、おしとゞめて、死せざりけり。

これより、かぞいろも。ふたゝび、とつがしめん、と、いふ事を、をそれて、いはざりけれバ。心のまゝに、しうとめに、つかへ、やしなひつゝ…

『假名列女傳』の訳は、原文の傍線部分を省略した以外は、ほぼ忠実である。ただ、原文の二重傍線部は使役形で、親に責任を着せる話し方である。それに対して訳文は自分の責任を強調する話し方になっている。ここも四と同じ、「妾」を「われ、みづから」と訳している。自分自身の孝・信・義に対する責任感を強調するためと考えられる。

七「息君夫人」は楚国に滅ぼされた息君の夫人を主人公とする話である。楚王に後宮に入れられた夫人は、人目を盗んで門番となった夫のもとへ行き、貞節を伝え、自殺することを宣言する。「人生要一死而已，可至自苦。妾無須臾而忘君也，終不以身更貳醮。生離于地上，豈如死歸于地下哉（人はやがて死ぬのです。自分を苦しめることはないでしょう。わたくしは少しの間でもあなたさまを忘れることがありません。他人の妻になることは絶対いたしません。生きて別れるよりは、死

んであの世で一緒になったほうがましです）」という。一国の君だった愛しい夫が賤しい門番となって生きていくことは、主人公のプライドが許さないのであろう。自分のこともさりながら、夫のことをも考えて、一緒に死のうと誘っている。きりりとしたプライド高き貞女像が、うかがわれる。

『假名列女傳』の息君夫人の話は次のようである。

人の、よに、あるに。をそく、とく。つゐに、ながらへ、はつべからず。**われ**、つゆのまも、キミを、わすれねバ。**ミづから**、さらに、人に、心を、あはすこと、いまゝでハ。ゆめ侍らず、かくて、ありへてのち。つゐに、心ともなき、うきめを、ミんも、しるまじき世なりけれバ。たゞ、いちはやく、身まかりつゝ。あゝる、うき、ありさまに。たちわかれゐる世を、ミざらんと、なん、おもふ

原文の傍線部分は訳出されていない。二重傍線部は自分に迫ってくる危機を前にしてそこから、死んで脱出したいと述べている。自分のことを中心にした発言で、自称も「われ、ミづから」となっている。夫を愛し貞操を守ろうとする思慮深い女性像である。

同じ敵国の王に迫られ貞操を守ろうとする国君夫人の話は九「楚平伯嬴」である。話しの相手は夫でなく、敵の王であるため、いかに自分を守りながら敵を退けるかは、その話術にかかる。主人公伯嬴はまず「妾聞天子者，天下之表也…」と天子の行うべきことを説き、夫婦人倫を乱すと国を治めることができないと述べる。最後に「妾以死守之，不敢承命。且凡所欲妾者為樂也，近妾而死，何樂之有。如先殺妾，又何益于君王（わたくしは死んでも仰せを承れません。しかもわたくしを欲しがるのは楽しみたいからでしょうに、わたくしが死んだら王様に何の楽しみもないではありませんか。もしわたくしを殺したら、それもまた王様に何のプラスもならないのでしょう）」と、死を賭けて拒否すし、相手を困らせる。さすがの呉王も恥ずかしくなり、伯嬴を殺すことも犯すこともできず、二度と近づかなかった。

『假名列女傳』は伯嬴の話しを、「**われ**、きく。天子ハ、天下の表なり…**われ**死すとも。きミが命を、きかじ。猶、又、き

ミの、**われ**を、おもふハ。たのしミを、なさんがため也。もし、おしたちて、**われ**に、ちかづき玉はゞ。**われ**、いま、死して、ミせ侍らん。さて、ころしてハ、何の、たのしミか、おハしまさむ」とほぼ原作通りに訳している。二重傍線部は自分の意志を強い打ち出し、死をもって相手を責める。

二に挙げた十四「梁寡高行」は女訓物によくある話である。季吟の訳はほぼ原文通りだが、高行が最初に梁相に言う「妾夫不幸早死，先狗馬填溝壑。妾宜以身薦其棺槨，守養其孤幼，曾不得專意。貴人多求妾者，幸而得免。今王又重之」の一段を省略した。この一段は殉死できない理由と貴人たちの求婚を免れたことを述べ、後の鼻を削る行動で死を免れる伏線を張るためである。省略されると次の信義を説く高行の言葉と行動が強くなってくる。原文の「乃援鏡持刀以割其鼻」を「すなはち、かゝミを、とり。かたなを、もちて。われと、わがはなを、そぎすてゝ」と訳し、鼻を削る動作を悲壮に描いている。この話に高行が用いる自称の「妾」はすべて「われ、わが」と訳されている。

節婦の話にも同じ傾向が見られる。巻之五節義傳の八「齊義継母」と十五「京師節女」はよく知られている。八の義継母は我が子を犠牲にして、先妻の子を助けようとする。丞相にわけを聞かれると、義継母は信義をもって語る。相手は丞相、自分は下死人の母、もちろん「妾」を用いる。十五の節女は父が人質にとられ、夫殺しに協力せよと敵に迫られる。夫と父を助けるため自分を犠牲にする決意をしたが、相手に悟られないため、「妾請開戸牘待之（わたくしは門と窓を開けてお待ちします）」と、言葉は柔らかい。『假名列女傳』ではこの二話の一人称をともに「われ」と訳している。我が子とわが身を犠牲する覚悟の表われであろう。

右の用例から見ると、原作の貞女節婦たちは謙称の「妾」を使い、上位の相手にはもちろん、敵や味方でない相手に対しても低姿勢で儀礼正しく振る舞う。相手によって取るべき言動を選び、貞操と信義を守り抜く。『假名列女傳』の主人公らは謙遜語の「やつかれ」や「わらは」などを用いずに、自分自身を指す「われ、わが」を使用している。それによって、話が主人公に集中し、貞操と信義を守る自己の意志の強さが原作よりも強まる。また、訳文は話によって内容を増減したり、

文章を前後したりすることなどもあり、一人称と相まって原作と異なる人物像となった。

五、古代中国女性と江戸女性

周知の通り、古代の中国は男尊女卑の国で、女性にはさまざまな規定がある。とりわけよく知られるのは、「三従四徳」「従一而終」「七去」である。『儀礼』喪服伝に、「婦人有三従之義，無専用之道。故未嫁従父，既嫁従夫，夫死従子（婦人は三従の義があり、専制の道がない。嫁ぐ前は親に従い、嫁しては夫に従い、夫死しては子に従う）」と女性に三従の義務を付けている。また、『周礼』天官九嬪に、「九嬪掌婦學之法，以教九御婦德・婦言・婦容・婦功」と女性に四徳を学ばせることを示し、女性に貞順（婦徳）、辞令（婦言）、婉娩（婦容）、絲枲（婦功）を要求している。『易経』恒に、「婦人貞吉、従一而終也」と再婚せずに終わることを貞節というのである。さらに、『大戴礼』本命に、「婦有七去，不順父母去、無子去、淫去、妒去、有悪疾去、多言去、竊盗去」と夫が妻を離縁する七つの条件を示している。

劉向が『古列女傳』を書いたのは前漢末期成帝の世である。成帝は身分の賤しい趙飛燕姉妹を寵愛するあまりに、皇后皇子を殺し宮中を乱した。加えて外戚が権力を握り、朝廷を恣にして天下も乱れている。そこで、劉向は母儀、賢明、仁智、貞順、節義、辯通、孽嬖の七つの方面から、婦徳の善し悪しが国家の治乱興亡に深く関わっていることを説き、成帝に諫めようとした。各話の根底にあるのは、やはり三従四徳や従一而終、七去の条である。たとえば巻之二賢明傳七「宋鮑女宗」に主人公が「婦人一醮不改，夫死不嫁…婦人有七見去方，無一去義」という発言自体、従一而終と七去の条を唱えている。巻之四貞順傳に挙げられた貞女たちも、みな従一而終と三従四徳に従う模範的な女性である。

つまり、『古列女傳』に挙げられている良妻賢母、貞女節婦らは、中国古代の理想的な女性像である。貞順であって、言

葉が謙虚で態度が慎ましい。身だしなみは清潔で、よく働き紡ぐ。母となる者は身だしなみと子育てを正しくすべきであり、妻となる者は夫に従い貞節を守り、ときに夫を助け諫めるべきで、貞節信義を守るため死を恐れず、道にならぬことは決して行わない。

一方日本は古くから婿入婚が行われてきたため、夫婦の離合がよくあることであった。三従四徳や従一而終などの条は中国から伝わってきてはいるが、強くは要求されていないようである。近世前期の文学作品に、『恨の介』『薄雪物語』『小倉物語』『是楽物語』などの恋物語があるほか、『きのふはけふの物語』などのような好色話もあるぐらい、近世前期の女性は性的に奔放であったという見方もできよう。近世の女性の異性関係について中野節子氏は、「儒教的教えにもかかわらず、女性が貞節を守らない例証が文学作品の上でも多く描かれている」ことは、「男性に応えるべき」という「社会的認識に従ったものである」と論じている。(注4) そもそも日本にも『めのとのさうし』『身のかたみ』など早期女訓書があり、その中で夫への隷従を説き、慈悲や義理をわきまえるべしなどとあるが、基本的には女性の日常生活や宮仕えにおける心得などを述べるもので、『列女傳』といったひたすら貞節信義を宣伝する中国の女訓書とはやや異質である。その中の女性像も「男をしっしおもう」や「ろうたくうつくしかるべき」「ただうつくしう御さた候べき」と要求されるように、美しく雅びである。しかし中世から近世にかけて、嫁入婚が武士階級から庶民階層へ普及したことにつれ、家父長制が強化されることになった。徳川幕府の文教政策によって、儒教倫理に基づく男尊女卑的価値観が浸透し、一般庶民の文化と生活をも厳しく規制することになり、女性に従順、貞節を求めるようになる。また、武家の妻には夫を支える強さも必要とされた。そこで『古列女傳』にある中国式の良妻賢母・貞女節婦がよき例として受容されるようになった。

季吟の跋文には「この列女傳は、はしめに、仁智節義の、しな〳〵を、あらハし、をハりに、孽嬖を、しるして、よきを、すゝめ、あしきを、こらす心ハへ、ミん人をして、徳を、つゝしミ、をこなひを、はけまさんと也。わかくにの、伊勢大和の物かたり、源氏さころものさうしなとも、つくれる人のほい、ひとしく、こゝに、ありとかや」とあり、劉向の作意を理解した上

で翻訳を行っていることがわかる。「大かたの、おもむきはかりを」訳したもので、すべて原作に忠実に訳したものではない。本稿で述べてきたように、一人称の訳においても、原作に即したものもあれば、自分の解釈によるものもある。特に、「妾」の解釈は、原作との違いが目立つ。

『古列女傳』では、第六巻まで巻毎にその主旨に合致する理想な女性像をとりあげ、模範となる言動を描き、読者に呈示している。主人公たちの行いのみならず、その言葉遣いも「婦言」の手本として書かれている。悪女の巻も同様で、行うべきでない言動を描いている。今回は一人称「妾」「吾」「我」「婢子」「余」「予」のみを抽出して、その使用状況から人物像の一面を見てきた。概ねAの「妾」「婢子」は妻から夫に、あるいは民婦から王や官僚に対して語るような、身分や社会的地位が下にある話者が上位者に対して用いることが多い。Bの「吾」「我」「余」「予」は母から子に、后から傅母に語るように、身分や社会的地位が上にある話者が下位者に対して用いることが多い。Cの隣人同士のような対等的な立場にある話者は、「我」「吾」を用いる事が多い。しかし、同じ身分であっても、立場の弱い話者は「妾」を用いることが多い。Dの貞女節婦は謙遜語として「妾」を用いることが多く、悪女は自己主張として「吾、我」を用いることが多い、という結論に至った。このように一人称を使い分けることで、物語の内容だけでなく、言葉の面からも人物像を引き立て、良妻賢母像、貞女像、節婦像、悪女像のそれぞれを浮き彫りにしている。

『假名列女傳』では、原作ABの一人称の使い分けを踏まえて、漢語の謙遜語「妾」「婢子」を和語の「やつかれ」「わらは」と訳し、指示代名詞の「吾、我」を「わが、われ」と訳している。Cの身分や立場が相似する話者の用いる一人称は、必ずしも原作に即した訳をされていない。主人公の年齢や身分によってAB同様の訳をされることがある。Dの悪女が「吾、我」を用いることについては、原作とほぼ同じである。ただ、貞女節婦に関しては、原作のようなせっぱ詰まった立場に置かれても、礼儀正しく謙遜語として「妾」を用いるのではなく、「やつかれ」などの謙称を用いず、「われ、わが」という自称を使用している。その場合発話を部分的に省略したり、前後に移動させたりすることなどもある。その結果、スポットをあび

るように主人公の貞操と信義を守る自己意志の強さがより表現されてくる。

俳人・和学者の季吟は古典文学注釈者としても名高い。『伊勢物語拾穂抄』と『湖月抄』は、それぞれ寛文三年（一六六三）以前と延宝元年（一六七三）の成立である。その注釈に現れる季吟の文学観を、島内景二氏は「教訓的な文学観」と説く。(注5) つまり、不義密通などの恋はいつか必ず世間に知られてしまうから、絶対にしてはならないという教訓である。『假名列女傳』跋文の「わかくにの、伊勢大和の物かたり、源氏さころものさうしなとも、つくれる人のほい、ひとしく、こゝに、ありとかや」という考えとも、合致している。季吟は、伊勢源氏には『古列女傳』と同じ勧善懲悪の考え方があり、読者に徳を謹み行いを励ませるための意義があるという。

このように見ると、季吟は『古列女傳』を翻訳する際、その教訓性をより強く打ち出そうとして、貞女節婦の話に力を込めた、と思われる。恋物語などによって「男性に応えるべき」と捉えられがちな、性的に奔放だった江戸前期の女性像を改めて、世の女性の行いを戒めようとする思惑があると考えられる。その一端は人称代名詞の訳に窺われる。

注

1、『假名列女傳』の本文は『仮名草子集成』第十七巻による（朝倉治彦編、東京堂出版、一九九六年三月）。ルビを部分的に省略した。

2、『古列女傳』の本文は国文学研究資料館所蔵大和文華蔵本のマイクロフィルム（257―508―4）『劉向列女傳』による（板元　小嶋弥左衛門〈京都〉、承応二年〈一六五三〉）。但し、訓点を省き、句読点を私につけた。

3、拙稿「『假名列女傳』の翻訳手法」（『二松』23　二〇〇九年三月）。

4、中野節子「補章　女性の性観念の変化」（『考える女たち――仮名草子から「女大学」』　大空社、一九九七年四月）。

5、島内景二『北村季吟―この世のちの世思ふことなき―』、ミネルヴァ書房、二〇〇四年九月。